

【講演記録/東方斎・荒尾精先生追悼式】

大倉精神文化研究所と日本精神文化曼荼羅に込められた大倉邦彦の理念

大倉精神文化研究所研究員 星原 大輔
(2019年10月26日、東京谷中の全生庵)

3年後の令和4年(2022年)は、大倉邦彦(東亜同文書院3期生)が大倉精神文化研究所を創立して90年目にあたります。現在、研究所ではこれまでの歩みを振り返り、創立者の大倉邦彦が何を目指していたのかを検討すべく、所内外の資料を幅広く調査しています。

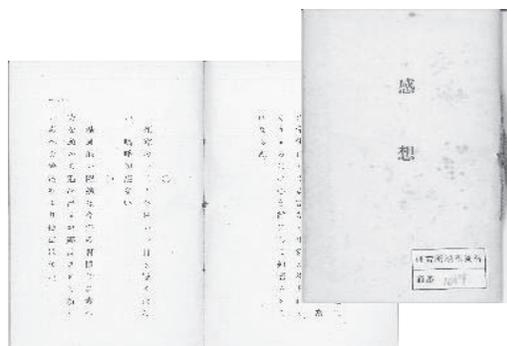


東亜同文書院同窓会(1期生~3期生)。前列右から3人目が、大倉邦彦。

その1つが、^{にほんせいしんぶんかまんだら}日本精神文化曼荼羅です。現在、研究所附属図書館の第一閲覧室に掲げられています。縦横2.5メートルという非常に大きな絵画で、実物を見ると圧倒されます。本年、この曼荼羅を一部修復するとともに専用の展示ケースを作成しました。併せて曼荼羅の内容を簡単にまとめたリーフレットも作りしました(公益財団法人大倉精神文化研究所ホームページにてPDF公開中)。本日はこれを基に、なぜ大倉邦彦が研究所を創立しようと思いついたのかとい

うことも含めて、日本精神文化曼荼羅とは一体何なのかということをお話させていただきます。

まず大倉邦彦が研究所創立を考えた背景について、2つの観点から述べたいと思います。1つ目は、最近の資料調査の中から見えてきたのですが、実業家という立場です。大倉はもともと佐賀県神埼市の江原家の次男でした。佐賀中学在学中、根津一が生徒募集のため佐賀にやって来て講演を行います。その内容に感銘を受けた彼は東亜同文書院への進学を決意したそうです。明治35年に商務科に入り、根津から倫理の講義を受け、論語やビジネスのノウハウを学びました。そして中国にある日本企業への就職を希望し、大倉洋紙店の天津支店(大倉洋紙商行天津出張所)に入社しました。その後2代目社長の大倉文二に認められて大倉家の婿養子となり、3代目の社長となったのです。他にもいくつかの会社の社長に就いており、



『感想』第1号(大倉精神文化研究所所蔵)

実業家としてかなりの成功を収めた人物と言えます。では大倉自身は、実業家は社会に対してどうあるべきだと考えていたのでしょうか。大倉が社員向けに出した『感想』という小冊子があり、自分の考えを次のようにまとめています。

商売の目的は何であらうか。私利を営む手段であってはなるまい。世の為に専念すれば自ら利益の副産物が収められる。その副産物をば、己の慾望満足にのみ費してはなるまい。国家社会を繁栄させる肥料としなければならぬ。(「神ながらの商売道」『感想(其十)』昭和9年2月)

ここにあるように、得られた収益はとにかく世の中のために使わなければならないというのが、大倉の実業家としての強い信念でした。書院の立教綱領にある「通達強立、国家有用の士、当世必需の才」に通ずるものが見えます。当研究所はこうした彼の信念の延長線上に誕生しました。

もう1つが、東亜同文書院の学生として上海に渡ったことです。この時の経験はその後の人生に非常に大きな影響を与えたようです。戦後大倉精神文化研究所所長などを務めた鎌田純一は、大倉から次のような話を聞いたと書き残しています。

当時の上海には西洋諸国の租界地があり、西欧人が中国人を蔑視して対するのに対して中国人は無気力で抵抗もしないのを見て、大倉は中国は儒教文化、仏教文化の栄えた大国と思っていたのにその状況、それに対して祖国日本は違う、皇国の伝統は着実であり、国民道徳も健全、思想も安泰、教育も充実し、欧米諸国に伍すべく努力していると思っていたが、帰国してあと、わが国は第一次世界大戦後の思想動揺、精神界の混乱

は烈しく、これに対して宗教も教育も無力、祖国もこんなであったか、これは本姿ではない。(鎌田純一「大倉邦彦の理想」『皇学館大学文学部紀要』40、平成13)

大倉は上海に渡ったことで世界というものを自分の目で見て知りました。それと同時に、日本とはいったい何かと考えたのでしよう。しかし大正になって中国から日本へ戻ってみると、社会のあり様が出発する前と大きく様変わりしてしまっていて、大きな衝撃を受けたのです。とりわけ思想の動揺、精神界の混乱が、大倉の目には大きな問題と映ったようです。そこで実業家として「利益」を世の中のために、「国家社会を繁栄させる肥料」とするためには何ができるのかと考えたときに、大倉は教育事業、そして精神文化事業がなすべき道であると思いついたのです。

大倉はまず富士見幼稚園を開設しました。幼いころの学びや体験が人間としての基礎

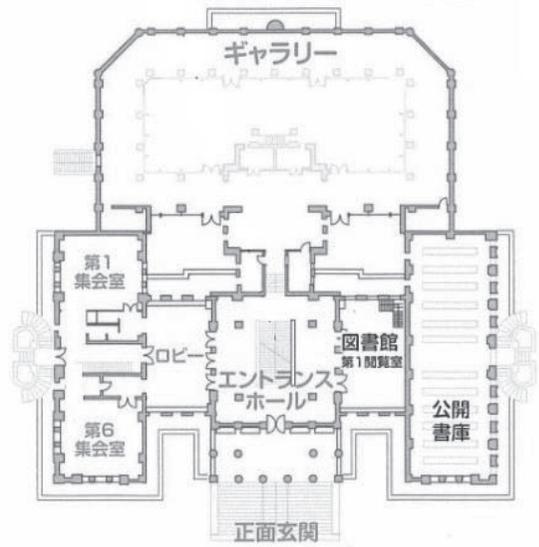


園児と遊ぶ大倉邦彦

を作り、その後の人生に大きな影響を与えると考えたからです。そうして幼児教育に携わっているうちに、幼児が一番影響を受けるのは母親の存在であって、そうであるのなら女子教育を充実させなければいけない、と考えるようになります。そこで次に、故郷の佐賀県神埼に農村工芸学院という女子を対象とする学校を開きました。そしてさらにもっと多くの人たちに自分の考えを伝えたいと思い、精神文化事業として研究所を創立することを目指します。

大倉が言う「精神文化」とは、大きく2つの柱からなっています。1つは「心」、内心の問題です。彼は信仰という言葉をよく使うのですが、人は心の中に「宗教的な信念」がなければならないと考えています。それは畏敬の念であったり感謝であったり、さまざまな表現ができますが、いずれにせよそこから初めて正しい人生観が出てくる、と。だからこそ一人一人が心の中に「宗教的な信念」を育むようにしなければならないと説いています。もう1つは「知性」です。人類の長い歴史の中で、さまざまな人たちが思索的営為に取り組み、多くの知識が積み重ねられてきました。大倉は、そうした日本の「精神文化の本質的価値」と「人類文化の普遍的意義」を学び、会得しなければならないとも説いています。

大倉精神文化研究所は、この「心」と「知性」という2つの柱を兼ね備えた若い人材を育成し、その研究成果を社会へ発信していく場所であると、大倉は位置づけています。そうして多くの人びとが「正しき信念に基づく国家観」、社会観を身につけるようになれば、世の中はよい方向へ進むだろうと考えたのです。



横浜市大倉山記念館 2階見取り図

研究所の本館、現在は横浜市大倉山記念館となっていますが、ここに足を運ばれた方はもちろん、最近は映画やドラマのロケ地としても使用されていますので、建物の外観をご存知の方はいらっしゃるかと思います。実は建物内の構造には、こうした大倉の理念が反映されています。入口すぐのエントランスホールはかつて「心の間」と呼ばれ、その階段の先に説教や祭祀などを行った殿堂（現 ホール）が、階段の裏には坐禅道場（現 ギャラリー）があって、心を鍛える場所とされていました。そして建物の左右が「知性」を表しており、附属図書館と研究室（現 集会室）などが置かれ、精神文化に関する研究や出版事業などが取り込まれました建物自体が大倉の理念を表す形として設計されているのも、横浜市大倉山記念館の大きな特徴なのです。

しかし大倉はここまで話したことをすぐに理解するのは難しいだろうと考え、一般の人に視覚的に伝えるために、本館建設と同時並行で作成したのが、先ほど触れた

日本精神文化曼荼羅です。研究所開設後から本館が横浜市に寄贈されるまで約 50 年間、この曼荼羅は研究所本館 3 階の貴賓室（現 第 5 集会室）に掲げられていて、来客があった際には大倉は必ずそこに連れて行き、この絵を見せながら、なぜ自分が研究所を設立しようとしたのかを説明していたそうです。

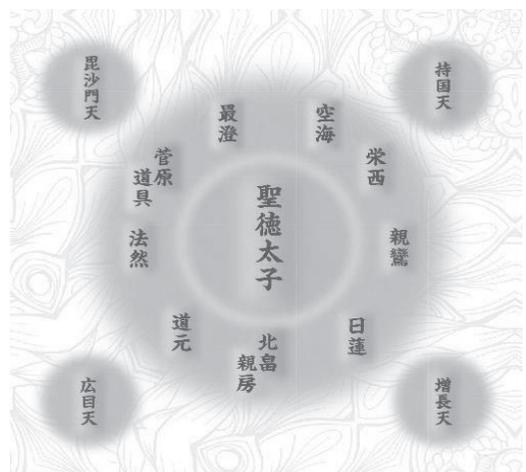
この曼荼羅の全体像を創案したのは大倉です。曼荼羅の中央に描かれているのは聖徳太子です。その周囲には、最澄や空海などといった日本の歴史・文化を象徴する人物が描かれています。残された資料によって、大倉が東京帝国大学史料編纂所の所長・辻善之助という仏教史学者らに、描く人物の選定を依頼したことが分かっています。辻らは、日本精神を象徴する人物として、仏教、儒教、そして神道からそれぞれ代表的な「先哲」10 人を選んだと、大倉に伝えています。

そしてこの人物たちをどういう形で配置して描くのか、大倉が曼荼羅の制作を依頼したのは画家の井村方外です。戦前の美術関係の書籍などを見ると、彼は日本最初の公設展・文部省美術展覧会（文展）の第一回で入選し、仏教画など宗教画を描く画家として、それなりに知られていたようです。しかし彼の作品のほとんどが東京大空襲で焼けてしまい、終戦直後の昭和 21 年に亡くなったため、今では残念ながらほとんど知られていません。大倉の依頼を受けた方外は、日本各地の寺院や美術館を回って人物の肖像画などを模写し、また曼荼羅の構図を研究しながら、この曼荼羅を完成させました。

さて研究所には、昭和 30 年代に大倉が研究所の内部を案内している録音テープが残



日本精神文化曼荼羅（上）、配置図（下）



っています。その中で大倉が、この曼荼羅を通して何を伝えようとしていたのかということ少し語っていますので、最後にそれを紹介したいと思います。1 つは「日本人の思想・心」です。聖徳太子を中心に、最澄や空海など仏教に係る各宗派の開祖をはじめ、学問の神様として著名な菅原道真は儒教の代表として、そして今ではあまり知られていませんが、神皇正統記を書いた北畠親房は神道の代表として描かれています。曼荼羅を通して、日本の歴史や文化がどういう人によって形成され受け継がれたのかを理解してもらいたいということです。

そしてもう 1 つが「人間は大宇宙の中で

生かされている」ということです。中心にある大小の 2 つの円は太陽と月を表しており、全宇宙を象徴する構図になっていると説明しています。そして円の周辺に人を描くことで、人間は生きているのではなく「大宇宙の真理」、すなわち大自然に生かされているということを表している、と。

このように日本精神文化曼荼羅は、大倉精神文化研究所の設立理念や大倉邦彦の人生観、社会観がうかがえる非常に大切な資料です。これまで大切に受け継いできましたが、さすがに 90 年近い時間が経ちますと痛みが生じ、劣化が激しくなってきました。またこれまで壁に掛けていただけでしたので少々不安定でした。そこで冒頭で触れたように、90 周年を迎えるにあたって、本年夏、修復したうえで展示ケースを新たに設けて保存することにしました。新しい展示ケースに入れたことで、曼荼羅はより一層映えるようになりました。ぜひかつての研究所本館である大倉山記念館に足を運んでいただき、附属図書館の閲覧室にある日本精神文化曼荼羅をご覧いただければと思っています。